

難波西鶴と

海の道

【43】

森田 雅也

前回は「関門海峡」の話をさせていただきまして、()まで話をした。()まで話をした。

和見乗り覚えて、西国の一尺八寸といへる雲行も、三日前より心得て、今程舟路の懐なる事にぞ。

「時津風静かに」と

うになつて、最近ほどの航海が安全になつた」とは進んだ「海の道」の安全性を強調します。

中国、朝鮮、九州、長崎、琉球等からの航路も

いう書き出しは、泰平の世を礼賛する、この

「世に舟あればこそ、一日に百里を越し、十日に千里の沖をほし

の道」を通過します。西鶴の『日本永代蔵』(元

句ですが、あえて訳せば「時節にかなつた順

り」

巻四の二)「心を疊込む

風は静かに」となるで

「世の中に船というものがあるが、船があるからこそ、一日に百里を行き、10日に千里の沖を走って、すべて

古筆屏風」の冒頭は、

和もデータ管理ができて、西国に発生する

の笠雲についても、3日前から予測できるとののだ(Almeida)です。

また、その「海の道」

を巧みに利用する商人

の笠雲についても、3日前から予測できるとののだ(Almeida)です。

の紹介です。

「時津風静かに、日

の笠雲についても、3日前から予測できるとののだ(Almeida)です。

「時津風静かに、日

の笠雲についても、3日前から予測できるとののだ(Almeida)です。

の笠雲についても、3日前から予測できるとののだ(Almeida)です。

鎖国下の日本とは思えない？

ますます船の利便性、万能主義の公言です。

「それは、大商人の心を、渡海の舟にたとへ、我が宿の細き溝川を一足飛に、宝の嶋へわたして見ずば、打出の小櫓に天秤の音きこ事、あるべからず。一生秤の皿の中をまはり、広き世界をしらぬ人こそ、口惜しけれ」

「だから、大商人の心は渡海の舟にたとえられるのであり、我が家の前の細い溝を一足飛びに越えるように勇気を持って宝島へ渡ってみなくては、打出の小櫓で金銀がぐんぐん湧くように、銀の目方を量る天秤をせわしく調整する町人たちの朝の小気味いい音を聞くことはない。勇気のな

「和国はさて置きて、唐へ投銀の大气、先は見えぬ事ながら、唐土人は律儀に、言ひ約束のたがはず、絹物に奥口(反物の巻口と裏との品質を交える詐欺)せず、薬種にまぎれ物せず、木は木、銀は銀に、幾年か変わる事なし」と、西鶴は日本より、海を越えた中国人との交易と心得を伝授するのですが、次回また。

「和国はさて置きて、唐へ投銀の大气、先は見えぬ事ながら、唐土人は律儀に、言ひ約束のたがはず、絹物に奥口(反物の巻口と裏との品質を交える詐欺)せず、薬種にまぎれ物せず、木は木、銀は銀に、幾年か変わる事なし」と、西鶴は日本より、海を越えた中国人との交易と心得を伝授するのですが、次回また。

「和国はさて置きて、唐へ投銀の大气、先は見えぬ事ながら、唐土人は律儀に、言ひ約束のたがはず、絹物に奥口(反物の巻口と裏との品質を交える詐欺)せず、薬種にまぎれ物せず、木は木、銀は銀に、幾年か変わる事なし」と、西鶴は日本より、海を越えた中国人との交易と心得を伝授するのですが、次回また。

外洋での商い堂々挑発

(関西学院大学文学部文学言語学科教授)